

村おこし、町づくりの現場から：滋賀県甲良町、京都府美山町

滋賀県甲良町、京都府美山町の住民参加の町づくり（グラウンド・ワーク）の現場を訪問する機会があったので、その紹介をします。甲良町は「躍進するせせらぎ遊園のまち」、美山町は「美しい日本の原風景を残すかやぶき民家と清流の里」をキャッチフレーズにして、地域住民と行政が協力して居住環境改善や地域振興を行い、成功例としてよく取り上げられている。

甲良町は、琵琶湖の東部、彦根市の南に位置し、人口約 8,500 人の町である。良質米の産地ではあるが、古くから水の確保には苦勞してきた土地で、水に対する思い入れも深く、それが町づくりの基盤ともなっている。昭和 50 年代後半の農村整備事業と農村景観保全との対立から、水環境に対する住民意識がより高まった。平成 2 年から集落毎に「村づくり委員会」を設置して、清らかな水と豊かな緑を活かした「水のまち」をめざして町全域的な環境整備事業を行っており、現在では町全体が親水公園とでもいえるような景観となっている。また美山町は京都府のほぼ中央から北よりに位置し、京都駅から車で約 1 時間半、町全体の 96% を山林が占める人口約 5,500 人の町である。平成元年、集落毎に「村おこし推進委員会」を設立し、かやぶき屋根の集落や豊かな自然資源を活かした観光開発（都市住民との交流を図るグリーン・ツーリズムやみそ・こんにゃく・地鶏等の特産品づくり）に力を入れている。

それぞれの土地に特異的なファクターがあり、それを生かしたというよりそれが制約要因にもなっているため、町づくりを考える場合そこから出発せざるを得ない、という状況がある。したがって、どこでも通用するようなマニュアル的なものをつくるのは難しいのかもしれないが、二つの町づくりの現場をみて共通して感じたことをあげれば、まず、町づくりはその地域のいいところを、そこに住んでいる人達自身が見つめることから始まる、ということ。それから両町とも行政と地域住民が一体となっている活動をしているが、行政側に熱心な人達がいる「行政主導型」といえる。

また、小規模ゆえの効率の良さ、きめの細かい対応ができる、ということ。例えば甲良町で見たような、各家庭に取り付けられた家庭排水の簡易浄化装置。これは、写真にあるような炭を詰めた竹製の浄水器で、汚れの発生源に最も近い所で、まだ汚れの少ないうちに水を処理しようとするものである。あるいは美山町で聞いた適正規模の交流、観光客の受け入れ。グリーン・ツーリズムが大きな収入源になっている美山町では、観光客が多ければ多いほど経済的には潤うはずだが、それによって失うものも大きいこと（例えば清里？）をよく認識しているようだ。日本の町づくりだけでなく、途上国援助を考える時にも大切な視点ではないだろうか。

（甲良町・美山町にて：大沼・湖東）



家庭排水簡易浄化装置 (甲良町)



かやぶき屋根の集落 (美山町)